

J **apanese text**

2018年 春/夏号 日本語編

インタビュー

アーティスト・インタビュー

竹本織太夫

——大阪で育まれた妙味を伝える

撮影=木村正史 文=岡崎 香

p.044

ユネスコ無形文化遺産にも登録されている文楽は、太夫、三味線、人形の“三業”が一体となって舞台をつくる日本の伝統芸能の一つだ。大阪は道頓堀に、三味線を伴った語り芸と人形芝居を合体させた人形浄瑠璃の常設小屋・竹本座ができたのは1684年。以来、大阪の庶民に生まれ、一時は歌舞伎を凌ぐほどの人気を誇った。

「日本が誇る劇作家・近松門左衛門は、竹本座の座付き作者でした」と話すのは、六代目竹本織太夫さん。文楽の三味線奏者を祖父に持ち、8歳で太夫に入門。以来名乗ってきた豊竹咲甫太夫を改め、今年1月に、江戸中期から続く名跡・竹本綱太夫の前名・織太夫を襲名した。次代の文楽界の担い手は、「文楽には日本の全てが入っている」という。

「近松が“浄瑠璃に悪人なし”と言ったように、その世話物には、どこにでもいる普通の人たちがふとした心の弱さから転落していく様が描かれています。文楽には、そんな江戸時代の日常や、日本人の人生観や宗教観、自然との関りから当時の最新技術まで詰まっている。一体の人形を3人で遣う世界唯一の技術や顔のパーツを動かす“カラクリ”、指の全関節を曲げて物をつかむ“たこつかみ”の仕組みを見ていると、ロボットをつくるDNAは、もともと日本人の中にあっただのかなと感じます」

生粋の大阪人でもある彼は、「文楽は実に大阪らしい芸能」とも話す。たとえば、『^{せつしゅうがっぽうがっじ}摂州合邦辻』という演目のもとになっているのは、能と説経節と、継母との恋や親殺しを描いたインドの物語。そこに、大阪の四天王寺近くにある合邦辻界

隈の地名や名所、さらにそこにあった料亭が有していた奇杯などを人名、モチーフとして取り込み、大阪版の物語に仕立てたものだという。

「面白いものをあれもこれも全部入れてしまうと、なんとも大阪らしい。なんせ、カツ入りカレーラーメン定食なんていうメニューがある土地柄ですから(笑)。キリッとスッキリが粋で好まれる江戸文化と違って、旨いものは全部取り入れようとする。旨味が強い出汁文化ともいえるかもしれません。太棹三味線の腹に響く音も、これでもかという太夫の語りも、舌の上でグルタミン酸がジリジリするような、実に大阪らしい味わいですよ(笑)」

自身の襲名披露では、その『摂州合邦辻』のクライマックス「^{がっぽうすみか}合邦住家の段」を務め、華やかさに凄味も加わった声と迫力満点かつ繊細な語りで、観客を物語に惹き込んだ。「今までは咲甫太夫が思う美味しいうどんを提供すればよかったけれども、これからは綱太夫家の暖簾の味を守らなければならない。責任重大です」と、自身をうどん店にたとえる。店の味なら、同じ材料とレシピがあれば伝承していけるが、生身の人間が担う伝統芸能はそうもいかない。

「いちばん大事なことは、歴代の綱太夫のファイティングスピリッツを後世に伝えることだと感じています。伝統は本来、仏教用語の“伝灯”で、灯を後世に伝えること。自分に油を注ぎ続けて精進し、お客様が思わず身を乗り出したり、泣けてきたり、鳥肌が立ったりするような、エネルギーあふれる舞台を務めてまいります。ぜひアミューズメントパークに行くような感覚で、いらしてください。ディズニーランドやユニバーサルスタジオに行く前に、ガイドブックでアトラクションの内容や位置を確認するように、大まかな内容と人物関係を予習しておくと、より楽しんでいただけたと思います」

竹本織太夫(たけもと・おりたゆう)

1975年、大阪府出身。1983年、豊竹咲甫太夫に入門、豊竹咲甫太夫を名乗る。1993年、文楽の初舞台を踏む。2018年1月に六代目竹本織太夫を襲名。また同月、自身の監修による書籍『文楽のすゝめ』を実業之日本社より上梓した。

●国立文楽劇場

大阪市中央区日本橋 1-12-10

4 月文楽公演

4 月 7 日～ 30 日 (19 日休演)

第 1 部 11 時～、第 2 部 16 時～ 1 等席 6000 円、2 等席 2400 円

文楽鑑賞教室

6 月 8 日～ 21 日

10 時 30 分～・14 時～ 3900 円

※ 6 月 16 日 14 時は英語の字幕、日本語と英語を交えた解説が付いた『Discover BUNRAKU』を開催。

●国立劇場 小劇場

東京都千代田区隼町 4-1

5 月文楽公演

5 月 12 日～ 28 日

『本朝廿四孝』ほか

www.ntj.jac.go.jp/english.html

(写真)

国立文楽劇場 2018 年初春文楽公演、八代目竹本綱太夫五十回忌追善・六代目竹本織太夫襲名披露狂言『摂州合邦辻』合邦住家の段より

宮崎いづ美

——変化し続けるリアルな不可思議

撮影＝西山 航 文＝編集部

p.046

「好きな食べ物は和食。特にお米と、それに合う物ですね。おにぎり山の頂上で片足を上げて立つ少女は、インタビューに答えて微笑む。意志の強そうな漆黒の瞳は明るい光をたたえるが、声はさほど大きくなく、態度も控えめ。そんな印象とコントラストを成すビビッドな洋服の色が、今をときめく若手写真家、宮崎いづ美その人を表している。

「食べ物って、特定の人だけがわかるものではないですよ。そういう普遍的なものが、不思議な世界の中に在る面白さを見せたくて」。「撮影が終わったら食べられますし」と小さく付け足す宮崎さんのセルフポートレート作品には、お

寿司や卵といった食べ物が多く登場する。左右に割られた自身の顔から零れ落ちる生卵、ブロッコリーの森から生える自分、頭の上にカウンターよろしく並べられる寿司……。そのほかの作品も、一見して「なんだこれは」と目を引く違和感。

作品は日常生活のふとしたところから着想を得る。普通は誰もやらないが、「実際やってみたらどうなるんだろう」という挑戦。頭が縦半分^{こぼ}にパッキリと割れたような、一瞬ギョッとする作品もあるが、根底にあるのはなんとも言えない不思議な明るさだ。それらが多くの人の視線に触れ、SNSを通じて着実にファンを増やしている。今や Tumblr のファン数は 1 万 6000 人を超えた。日本のカメラ雑誌 PHaT PHOTO の表紙を飾り、米国 TIME 誌や CNN の取材も受ける。ギャラリーに所属せず、自然発生的にできたファンに支持されて活動を続ける、稀有なアーティストである。

写真を始めたのは高校生の頃。CM やドラマのつくり込まれた世界観が好きで、そこから写真表現の面白さにはまり、美術大学に進学。1 年次課題で始めたセルフポートレートが、今も面白くて続けている。「あの課題作品を手放して褒めてくださった先生がいなければ、もしかしたら続けていなかったかもしれません」。

作品の多くは、山梨にある 30 平米に満たない自室で撮影・編集されている。1 作品の編集時間は約 5 時間。自分なりのアートディレクションが明確なので、そこまで悩まない。ジャッジは自分。「当初はかなりの頻度で作品を制作してきました。最近は忙しさもあって発表の間隔は以前より空いていますが、自分が納得できるものは増えていると思います」。

海外からのオファーも多く、着実に展示回数を重ねている宮崎さん。今年の春は京都市一帯を会場にした国際写真祭、KYOTOGRAPHIE に参加する。最年少作家で、メインビジュアルの一つにも選ばれた。「UP」という今年の展示テーマと、宮崎さんの作風がマッチしたという。禅寺や場外市場などのユニークな場所で展示が行われるなか、宮崎さんの展示会場となるのは ASPHODEL という 3 階建ての大きな現代建築だ。「初めての広さですね。今まさにアイデアを固めてい

るところですが、「展示でもあり、インスタレーションでもある」ような方向に持っていきたいと思っています。できれば参加型にしてみたい」。新作も登場予定だ。

今年 24 歳になる宮崎いず美さん。大学を卒業してから、男女差別などがすこし気にかかるようになった。「これからはそういうテーマも写り込んでいくかもしれませんね」と語る。

セルフポートレートという手法で彼女の変化が写ってゆく。2018 年、もっと写真に力を入れていくと決めた。宮崎さんの瞳が何を写し、どう変化していくのか。これからがますます楽しいアーティストである。

宮崎いず美(みやざき・いずみ)

山梨県出身。2016 年武蔵野美術大学卒業。在学中より自身を被写体としたシュールレアリスティックな作風の写真を Tumblr 上に発表し、ネットにて注目を集める。国内では THE TOKYO ART BOOK FAIR、国外ではヨーロッパのアートフェア等に出展。2016 年「Cute & Cruel」展 (Wild Project Gallery / ルクセンブルク)、「stand-in」展 (Art-U room / 東京)、2017 年グループ展「Give Me Yesterday」(Milan Osservatorio / ミラノ) 参加。

(写真)

母校、武蔵野美術大学の図書館前にて

第 6 回 KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018

4 月 14 日～5 月 13 日

嶋臺(しまだい)ギャラリー、菅田屋源兵衛 黒蔵 / 竹院の間、京都文化博物館別館、ASPHODEL、建仁寺両足院、京都市中央市場場外ほか
www.kyotographie.jp/en

期間中はアーティストが参加するパブリックプログラムも多数開催予定

(写真)

《おにぎり山》2016 年 © 2016 IzumiMiyazaki

《へい!おまち!》2017 年 © 2017 IzumiMiyazaki